

山形大学・ユニバーシティミーティング - 地域における大学の役割と将来像 -

開催日：平成 1 7 年 4 月 2 2 日（金）

場 所：山形大学

報 告 書

山形大学総務部総務課

山形大学・ユニバーシティミーティング - 地域における大学の役割と将来像 -

本学では，山形県出身の結城文部科学省事務次官と齋藤山形県知事のお二人をお迎えし，「地域における大学の役割と将来像」と題して，大学初のユニバーシティミーティングを次のとおり開催した。

1．開催日時 平成17年4月22日（金） 16：30～18：35

2．場 所 山形大学教養教育1号館（2F）127番教室
次の場所とはリモート講義システムで接続
（ ・小白川キャンパス 事務棟第二会議室
・飯田キャンパス 視聴覚教室
・米沢キャンパス 中示範C教室
・鶴岡キャンパス リモート講義室

3．参加者 山形大学学生・教職員（約300人）

4．概 要

開 会 山形大学総務部長

学長挨拶 山形大学長 仙道 富士郎

パネルディスカッション

【パネリスト】	金澤 真理	山形大学人文学部助教授
（五十音順）	齋藤 弘	山形県知事
	仙道富士郎	山形大学長
	結城 章夫	文部科学省事務次官
【司 会】	鬼武 一夫	山形大学理事・副学長

閉 会 山形大学総務部長

1. はじめに

山形大学では、「地域における大学の役割と将来像」をテーマに、山形大学ユニバーシティミーティングを4月22日(金)に小白川キャンパスを基点に飯田(医学部)、米沢(工学部)、鶴岡(農学部)の各キャンパスと同時中継により開催した(参加者約300名)。

これは、文部科学省のスクールミーティングを参考に山形大学が独自に取り組んだもので、結城章夫文部科学省事務次官(山形県出身)、齋藤弘山形県知事を招き、仙道富士郎学長、金澤真理人文学部助教授の4名をパネリストとして、鬼武一夫理事・副学長の司会によりパネルディスカッションを行った。

まず初めに各パネリストから10分程度の発言があった。この中で、結城次官からは、法人化後の特色ある大学の取組事例や高等教育に関する中教審答申、科学技術基本計画等についての発言があり、齋藤知事からは、山形大学への期待と県の山形大学への支援策について発言があった。また、仙道学長から新学部である地域教育文化学部の設置に至る経緯、法人化後の問題点や地域と連携した取組みについて発言があり、金澤助教授からはドイツへの留学経験を通してドイツの大学との比較による発言があった。

その後、パネリストによる意見交換が行われ、その後の質疑応答では学生を中心に、学生と地域との連携の必要性、法人化後の予算配分、企業との研究のあり方、競争的資金の獲得、基礎研究の重要性などについて大変活発な質疑応答が行われた。最後に結城事務次官から、「これからは法人化によるメリットを活かし、果実を摘み取る段階。大学の個性、特色を出して発展していただきたい。」との発言があり、司会の鬼武理事・副学長が締めくくりの挨拶を行った。

また、閉会後は、会場を学内の厚生会館に移して、次官、知事を囲んで学長、役員、教職員、学生が大勢出席し、沼澤理事・副学長の乾杯の発声により和やかに意見交換会が行われた。



パネルディスカッション

左から

仙道学長
齋藤知事
結城次官
金澤助教授
鬼武副学長(司会)



学生たちと談笑する

左から

齋藤知事
結城次官
仙道学長

2. 学長あいさつ

本日は、結城章夫文部科学事務次官、並びに齋藤弘山形県知事をお迎えいたしまして、全国で初めて、山形大学でユニバーシティミーティングを開催できて、大変うれしゅうございます。お二方には、大変公務のお忙しいところをお越しいただきまして、山形大学を代表して深く感謝申し上げます。

皆様ご存知のように、結城次官と齋藤知事は山形県のご出身でございまして、先にお二人と懇談する機会がありましたが、そのときに次のような話が出たのでございます。と申しますのは、文部科学省のほうでは、教育改革を広報するというようなことを目的として、いま全国で、スクールミーティングという、幹部の方が小・中学校に出かけて行って、実際に話をするということが行われております。政府のほうでは、もうかなり前から、地域のみなさんの声を直接お聴きすることがありますけれども、大学でもそういう試みができないだろうかというような話が進みまして、今日のような機会を得ることができたわけでございます。

これから、『地域における大学の役割と将来像』というタイトルでパネルディスカッションを行うわけですが、結城次官と齋藤知事からは、教育行政、地方行政トップの立場からいろいろな話をお伺いできるだろうと思っています。金澤先生からは教育研究の現場からの声ということで、貴重な意見がいただけると思います。

本ミーティングは、各キャンパスをリモート講義システムを使って結んでおり、学生諸君も参加していると思いますが、講義のほかに、こういった大学がどういうふうに動いているかといったことにも、ひとつ耳を傾けて、何かいいものを感じてもらえればなと思います。また教職員のみなさんには、これを機会に教育研究の参考にいただければと思います。

3. パネルディスカッション

(1) 各パネラーの発言要旨

○鬼武理事

本日の進め方は、各パネリストの方から10分程度お話いただいて意見交換をして、その後にフロアのほうから質問等をお受けしたいと思います。

○結城文部科学事務次官

平成13年の4月の小泉内閣の発足より「聖域なき構造改革」ということから、いろんな分野での改革が進められ、教育の分野も例外ではなく、この4年間に幼稚園から小・中・高校、さらには大学・大学院まで、教育のすべての分野で、非常に広い範囲で、スピードの速い改革が進行中であります。

国立大学についても、平成16年4月に国立大学の法人化という大改革が行われました。これは、国、文部科学省としても、また大学側、大学人にとっても、大きな決心であり、歴史的な大改革、大きなチャレンジであったと思います。

その後1年経った全国の国立大学を見てみますと、いろんな意欲的な取り組みがなされています。いくつかの例をご紹介しますと、例えば、教育や研究機能を強化するため国際交流とか産学連携の拠点を海外に作ろうということで、一橋大学が中国の北京に事務所を構えています。京都大学もアメリカのシリコンバレーに海外事務所を設置しています。また東京大学は、金融界と連携をして、金融研究センターという特色のある研究組織を作るという動きも出てきています。学生サービス・学生支援ということでは、徳島大学、山口大学は成績優秀な学生に対して、大学が独自の奨学金、あるいは授業料を免除するなどをやっています。広島大学では県庁・企業の専門家を専任教員として招聘し、地域貢献とか産学連携のための組織を新たに作るということも行っています。また、非公務員化されましたので、非常に弾力的な人事ができることから、東北大学では、海外から理事を招いています。北海道の北見工業大学では、新規採用の全教官・教員を任期制にしていますし、大阪大学では、教員の一部に年俸制

を導入するという改革を行っています。また東北大学では、海外のノーベル賞級の研究者を特別な破格の優遇で招聘するというこもしています。

いくつかの例のとおり法人化をして各国立大学が、今、大きく変わりつつあり、これからは、新しい国立大学法人というシステムをなるべく早く定着をさせ、法人化したメリットを今まで以上に引き出すということが、大変大きな課題になっていると思います。法人化の果実を摘み取っていくという時期に入ってきているというふうに考えています。

こういう国立大学の状況を受けまして、中央教育審議会が中長期的な高等教育政策として「我が国の高等教育の将来像」というレポートをまとめました。ユニバーサルアクセス時代を迎え、大学がそれぞれの個性特色を出していくことが必要として、大学の役割として7項目ほど書かれています。たとえば、世界的な研究・教育の拠点機能であるとか、高度専門職業人を養成する機能、総合的な教養教育を行う機能、あるいは地域の生涯学習の拠点などです。この役割をどういうバランスで、それぞれの大学がどこに力を入れて、どういう方向をめざしていくのか、それぞれの大学が考えながら、緩やかに特色を出し、分化していくという流れになると思われます。また、施策としては、大学の教員組織の助教授・助手の仕組を助教授は准教授、助手は助教に名前を改める法律改正の提案を国会に出しています。さらに、大学院の教育の実質化のために大学院教育を充実するためのステップをまとめていこうとしています。財政面でも、諸外国並みに国の予算を増やすべきでありますし、同時に大学が民間企業とか、外部の資金を自ら集めてくる努力もすべきであるとも言っています。さらに財政支援は、大学に対する機関補助と、学生に対する個人補助のバランス、基盤的経費と競争的資金の有効な組合せが重要になってくると述べています。このように、将来の日本の高等教育のあるべき姿を描き出し、それに向かって何をすべきかということの提言がこのレポートに書かれています。

次に、政府は5年ごとに科学技術の基本計画というのを作成しています。第一期は科学技術の政府投資の増。第二期は平成17年度までで、ポイントは重点四分野、ライフサイエンス、ナノテクノロジー・材料、環境、情報通信の重点化と競争的資金の増です。第三期の基本計画は平成18年度開始で、これから1年以内にその中身を固めますが、その柱の一つは人材政策です。大学、大学院を含めて研究者あるいは技術者の人材育成を大きく取り上げていく。それから基礎研究の重視。これは大学が中心になるかと思いますが、重厚な知的基盤を蓄積していこうということです。その他いろいろ提案がありますが、科学技術のほうも大学を中心に施策を検討していきます。



(発言する結城次官)

○ 齋藤山形県知事

山形大学への期待として、一つは地域貢献に関しての期待、二番目として、教員養成に関しての期待が高まっており、この二つについてお話します。

一つ目の地域社会の発展に関しては、民間機関との連携を深めるという観点から、山形大学では「地域共同研究センター」を発足し、また、県内全域を網羅するため霞城サテライト・最上サテライト・庄内サテライトをそれぞれ各地域に設置して、「開かれた大学」を実践しておられます。まさに大学内に蓄積された知識・知恵を地域に還元して行く姿が現れています。最近では最上地方において、地域の方々の熱い要望に応え「山形大学エリアキャンパスもがみ」を開設し、最上地区全体を大学のキャンパスと見立てて、8つの市町村と連携して研究・教育活動を展開しておられます。

二番目は、教員養成にかかる山形大学への期待についてです。山形大学では、地域の声に真摯に耳を傾け、地域教育文化学部を創設しました。この学部では六年一貫教育という教員養成システムで、本県の義務教育の中核となる、素晴らしい教員を計画的に養成することとなりました。

こうした中で県としては、山形大学の研究成果が地域社会・地域産業界に活用され、山形県の県勢発展の原動力になるよう、支援を続けたいと思います。

最近では、「財団法人山形県産業技術振興機構」が推進する「山形有機エレクトロニクスバレー構想」などを通じて産学官連携を強化してさまざまな研究開発のプロジェクトの推進や知的財産権の活用等を行っています。県では、有機ELの研究開発に要する経費として43億円を投入する予定であります。

教員養成については、「財団法人やまがた教育振興財団」を設立して、大学院での修学に要する入学金及び授業料の全額を無利子で貸与し、頑張る学生が安心して修学できるようバックアップを行うとともに、全国でも初めてとなる六年一貫教育をしっかり組み立てるため、計画的に調査、研究を行ってまいります。



(発言する齋藤知事)

○ 金澤人文学部助教授

制度上の相違を踏まえてドイツの大学に留学した経験から述べます。第一にドイツでは、大学進学資格試験に合格すれば原則的にはどこの大学にも入れます。日本のような偏差値タテ割りでないことから、主に地元の学生の受け皿となり、入学希望者を受け入れるというのが大学の一つの役割として期待されています。大学の特色、あるいは個別化というものは、教授陣がどういう研究をしているか、どういう研究成果を出しているかということに現れ、学生もどういう研究がしたいかを教授の研究成果

によって判断して、大学を選ぶという傾向があります。そのようなことから、いわゆる有名教授を大学に招請して、学生を呼ぶという動向も見られます。

ドイツの大学では、教育と研究の統一といったことが理念として掲げられています。研究者は、ただ単に知識を伝えるというプロセスに参加するのではなくて、アクチュアルな、自らが従事している研究の成果を、実際に学生の目の前で见せる、呈示するということが求められています。そのため、研究に非常に重点がおかれ、かつ教育面においても、助手の制度を通じたサポート制度があり、研究に従事しやすい工夫が、財政難の中、なされています。

次に、大学と地域との関連では、大学が学ぶ場やプロセスを用意していることです。大学が単なる場所の提供、設備の利用の促進をしているだけではなく、開かれた大学として、地域に対して、積極的に耳を傾けていることです。

さらに、外部に対する責任ということでは、日本で言うと国立大学に相当する州立大学のみならず、ビジネス専門系の私立大学なども含めて、外部評価、認証評価が行われています。総じて、大学における制度設計において、一体大学は何のために置かれているのかという目的理念に立ち返って考えることこそ重要であるという共通認識に立っていると思われます。

大学は、研究の拠点、知の発信地、また教育の場である、すなわち学生が良好な修学環境のもとで、自ら主体的に学べる場であるという原点を再認識すること、この点を常に忘れないということが非常に重要であると教育の研究の現場から常々思っています。



(発言する金澤助教授)

○ 仙道山形大学長

パネルディスカッションタイトルの「地域における大学の役割と将来」に沿って、山形大学はこの問題に具体的にどのように答えるかを、「地域と大学」というキーワードにて話したいと思います。

地域と大学のかかわり合いということで、山形大学でこの数年間でとても大きな問題となったことは、教育学部の改組による地域教育文化学部の新設とそれに至る山形県、山形市、そして県民のみなさんとのかかわり合いだったと思います。2年以上にわたり、7回に及ぶ「教員養成に関する懇談会」を行い山形県の教員養成ということについて、非常に一生懸命に、熱く語り合ったということだと思います。私自身は、この中で、教員養成がいかに地域との関連の中で行われるということ、大変勉強させていただきました。また、非常に熱い、密度の高い議論をして、山形県、山形市、そして県民のみなさまと山形大学の距離が従来よりも非常に近くなったという感じを

抱いています。「地域教育文化学部」という、そのネーミングにつきまして、その心を私なりに考えていることを紹介させていただきます。

中教審から我が国の高等教育の将来像という答申が出て、高等教育のグランドデザインが示され、その中で地方における高等教育機関の存在意義といったことについて触れている部分があります。そこには、地方の高等教育機関は教育サービスの提供だけでなく、地域社会の知識・文化の拠点と中核として、また地域活性化の拠点としての役割も果たさなければならないと述べられています。今回、新設されました地域教育文化学部の「地域」という言葉は、今私が申し上げたような文脈の中での地域であるということと、地域活性化のために、私たちが働きかけているその場が、教育であり、文化であるということをご理解いただければと思います。

山形大学の特徴の一つは、研究が地域との非常に密接な連携の中で成立しているということです。例を挙げてみると、平成15年にCOEに採択された研究課題で、一人一人の患者さんに適した医療を行う研究の築くためのものですか、これは、ある地域の保健関係者と山形大学の医師が一緒に25年以上にわたって行ってきた糖尿病の検診のデータが基礎になっています。また、有機ELに対して県が研究所を作り研究をサポートしているなど、まさに山形大学のモットーの一つである、「地域に根ざして世界をめざす研究」だと自負しています。

次に、山形大学の最も大きな問題点の分散キャンパスを逆手にとって、各キャンパスが、その地域に密着し地域振興に寄与するということが行われています。農学部では、庄内にある在来作物の保存のための研究会を設立し活動していますが、そこには庄内の食に関係した方々もたくさん参加しています。また、高等教育機関が存在しない最上地域の八市町村から要請を受け、最上地域全体を山形大学のキャンパスと見立てるという構想で「エリアキャンパスもがみ」を立ち上げた。さらに、地域の中における連携ということで、山形県の六つの大学・短大が一緒になり教育改善のプロジェクトを文部科学省に申請して、昨年認められました。

法人化後の大きな問題点は、大学の財政です。こんなところで申しますのは違反かもしれませんが、そびえ立つ高い山にたいするサポートと同時に、研究の裾野を広げるためのサポートにもぜひ力を注いでいただきたいと思います。

当面の緊急の課題は、大学全体の組織の効率化と思っています。その効率化に基づいた大学のコア部分の強化になると思う。何が大学のコアかということが問題になりますが、たとえば学生の教育現場に関連した部分などが挙げられるのではないかと思います。



(発言する仙道学長)

(2) 各パネラーの発言要旨

○ 鬼武理事

それでは、法人化後の取り組み等についての感想をお聞かせいただければと思います。

○ 結城次官

全国の国立大学は、去年の4月に89の国立大学法人として、国から外れていきました。

法人化前の国立大学は、文部科学省の内部組織として国の仕組みで規制・統制をしていましたが、これをやめ、事前規制から事後チェックへの切り替えとなりました。6年間は、それぞれの大学法人で、自由に自主性、自立性をもって自分の思う方向に創意工夫をして進めていただきたい。

評価の結果、成果を上げている大学は伸ばしていくし、成果の上がっていない大学は、場合によって事業縮小であるとか、予算の縮減ということもありえます。

この法人化で、成功していく鍵は、学長のリーダーシップ、先見性であり、その学長を補佐するマネジメント体制の企画力・実行力であるというふうに思います。

国立大学法人に適用される法制、システムが変わりましたので、効率化を図り無駄なことはしないようにしていただきたいというふうに思っています。

大学は、全部自分の判断で勇気をもっていろんなことにチャレンジして大きく動いてほしいと思います。



(司会の鬼武理事)



(聞き入る参加者)

○ 鬼武理事

高等教育の将来像における認証評価及び国際性についてお聞かせ願いたいと思います。

○ 結城次官

この大学の法人化とともに、国公私すべての大学は、質の保証、国際通用性の確保から、外部評価として認証機関の認証評価を受けることが制度化されました。いままでは大学の自己点検評価を進めていたが、外部評価にさらされるという時代になってきました。また、国立大学法人の評価として、6年のサイクルで、中期目標期間の成果はどうであったかを厳しく評価をし、良い成果のところは伸ばし成果があがっていないところは見直すことで質の保証につながっていくと思われます。これから評価が重要な時代になってきたと思っています。

○金澤助教授

効率化が非常に重要で、どんどんスリム化、無駄を省いていただきたいというわりには、非常に忙しくなって無駄なことが増えているのではないかと思います。

また、評価に備えた事後的なチェックのために重要な前提があります。それは開かれた情報、かつ、公平にアクセスできる情報です。相互的なコミュニケーションを保障するという意味では絶対必要なことだと考えます。また、大学の責任者としてリーダーシップがこれから問われると言われましたが、責任ある発言をするためにも、正しい情報にアクセスして、相互的に開かれたコミュニケーションを行えるようお願いしたいと思います。

○鬼武理事

これに対して何かご意見がありましたらよろしくお願いします。

○結城次官

いろんな情報を流通させるのは重要なことで、これはまさに本省の役割であると思います。さらに国立大学協会という社団法人ができてあがりましたので、情報の流通をしながら、それぞれが協調しながら競争していくといういい関係にもっていくべきだと思っています。

(3) 質疑応答

○鬼武理事

これまでのパネリストの方々のご発言を受けて、ご質問等いただければと思います。

○教員（地域教育文化学部）

やまがた教育振興財団の具体的な話で、入学金それから授業料を、6年間の場合には大学院まで貸与するとあり大変感激しております。もう一つの、山形県として考えている研究助成とか調査研究とか、そういうところを、もし具体的に話ができるようでしたら教えていただければありがたいです。

○齋藤知事

全国初の教員養成システムであり、調査研究は大変大切なことと、県でも認識しており、計画的に調査研究事業を実施したいと考えています。教育振興財団はこれからスタートしますが、この中で具体的な対応を考えていきたいと思っています。



(質問する教員)



(回答する齋藤知事)

○ 学生（人文学部 4 年）

大学が地域への貢献を考えるならば、足元の我々学生が地域の住民と良好な関係を築いていくことが重要と考えます。大学生が、県民として何を求められ、地域住民としてどのように暮らしていくかという、そういう教育がまずあってしかるべきではないかと、学生の立場として考えています。

○ 仙道学長

大学として、地域貢献としての地域と学生の間をどのようにヘルプして、何を作れるかがあります。「エリアキャンパスもがみ」という新しいプロジェクトは、学生のボランティアが中心になって行うべきプロジェクトだというふうに思っていて、今、動き出しております。それで、「最上協力隊」という名前をつけて、今、学生諸君にボランティアの呼びかけをしております。そのような、課外活動は、非常に大事な教育の鍵だと思っております。

○ 学生（人文学部 3 年）

大学の先生が助手・助教授・教授とあるのは、変わるかもしれないというお話がありました。ドイツの大学は、日本と比較して、どういう役職があるのか。その仕組みを比較して、どのようにお考えになるか。文部科学省が考えているように変えたほうが良いと思うのか聞かせていただきたいと思います。

○ 金澤助教授

ドイツの大学のシステムは、かなり制度上違うため、比べるのが難しいところがあります。大学院で博士学位論文を書いて、そのあと法律の場合、検察官とか弁護士とか裁判官という実務修習、実務的な仕事をしてから、教授資格請求論文という論文を書く資格ができ、この教授資格請求論文を書いて、初めて大学の先生になる資格を得られます。大学の教授というのはProfessor、あるいは女性の場合はProfessorinといいます。日本で言う講師、助教授、教授の区別はありません。

それから二番目の質問ですが、実質的に何が変わるかまだ十分わからない部分があります。ドイツでは教育にも相当程度の力を入れており、そのときに重要な役割を果たしているのが、Mitarbeiterと呼ばれる助手の人たちです。

○ 結城次官

今の日本の制度では、助教授は教授を助ける、助手は助教授と教授を助けるという位置づけになっています。それは講座制度の秩序を作るのに機能してきたのですが、若手研究者が教授の下で自立しにくいということが、世界標準に合っていないくて、アメリカでは、若手が自立した研究者として、どんどん活躍しています。そうしたことから、助教授を准教授として教授を助けるという役割を文書上書かないことにし、それから助手も助教ということで、将来准教授あるいは教授にのぼっていく若手研究者であるという位置づけにしようという考え方で、今、法律改正をしているところです。

○ 学生（理工学研究科 1 年）

次官からみて、山形大学に求めている評価・研究というのはどういうものでしょうか。たとえば、国からお金をもらえる研究だけ集中的にやって、それができない研究は止めてもらって学生の質をあげてもらう。このことが世の中の原理に合っているので文科省としても望んでいるのでしょうか。

○ 結城 次官

国立大学法人というのは、国が政策的に支えている大学であります。国立大学法人は、知的基盤を養うと言いますか、基礎研究の畑を耕すと言いますか、そういうことが大変重要であって、当然そういう観点で評価もされますし、決して効率一辺倒ではないと思っております。それはまさに国立大学法人に期待されている役割だと思っております。



(回答する仙道学長)



(回答する結城次官)

○ 教員（人文学部）

今の大学に関して社会が注目しておりますのは、とくに知識基盤としての大学の役割というのが大きくなっているということが言えると思います。そのような中、国立大学が法人化することになり、国立大学間の競争が行われており、大学は、地域社会との関係、さらに、教員・学生の質の強化などが求められていると思います。

そういう中、山形県におきましても、教員・学生の支援、地域社会に対しての大学の関係などのところについて財政的な支援を積極的にやっていただきたいなと思います。今後山形県として、山形大学を発展させるといった面から、決まっていなくても結構ですから、何かプランがありましたらお聞きしたいと思います。

○ 齋藤 知事

一つは地域における大学の役割についてです。「大学コンソーシアムやまがた」があります。これは県内の四年制大学4校と、県とによって昨年設立され、県内高等教育の一層の充実、並びに地域への貢献を目指した、大学の連合体です。

もう一つ、産業との連携があります。シーズとニーズがマッチして、産業集積まで、有機ELが大きく花開かんとしております。単に山形県の中だけではなく、広域的に東北の中での産学官協同についても、輪が広がっていく兆候があります。県としても輪の広がりを求めていきたいと思います。

○ 教員（地域教育文化学部）

大学改革は、60年代の終わりに、日本の大学始め、世界でいろんな改革がありまして、そのとき一番の抜本的な改革を行ったのはドイツです。ドイツで作った新しい大学、新構想大学が日本の筑波モデルになったわけです。しかし、ドイツの大学が成功したかということ、1996年の1月に、ドイツの大学連盟の学長のジャーゲンが、ドイツの大学は、90年代になってアメリカに負けていると述べております。先ほど話しがりました助教授を準教授にすることなどはアメリカモデルです。それと同じように、ここ20年くらいで世界のどこが一番成功したのか、また世界で今一番生産的な良い大学はどこの国のどの大学かを特定してモデルとしてやらないと、私はまずいような気がするんですがいかがでしょうか。

○ 結城次官

本当に改革というのは難しいものだと思いますが、だからといって現状維持がいいとも思いません。今、日本の大学は、大部アメリカに差をつけられていると
思っております。法人化をして、いろんなことができるようになったわけですから、ぜひ良い方向に、これを活用して動いていって欲しいと心から思います。

○ 鬼武理事

今日のパネルディスカッションについて、感想等を含めてご発言いただければ
と思います。

○ 齋藤知事

山形大学には地域貢献が求められているし、求めていくことがすなわち研究の
成果、実績につながって循環になっていくと思っております。山形県としても、
協力できるところは積極的に協力していきたいと思っております。

○ 金澤助教授

本日は大変アクチュアルな動向についての情報、貴重なご意見のみならず、学
生の方々からの非常に率直な意見を拝聴することができまして、私自身も大変勉
強になりました。

○ 結城次官

私も本当に現場の生の声を聞かせていただいて、大変参考になりました。これ
からの行政にぜひ反映していきたいと思っております。

○ 仙道学長

山形大学が法人化になって動き出しました。みんなで動こうでないかという呼
びかけも対応してもらっていると思います。みんなが考え、素晴らしいことをピ
ックアップして、それを実際にやっていくということだろうと思います。

○ 鬼武理事

結城次官から言われた法人化というのは努力をすれば必ず成果が評価されて、
そして必ずメリットがあるんだという、これを大事なこととして、もしそういう
ことができていないとするならば、やはり学長を始めとした執行体制がまだ十分
に対応していないということになるのだろうと思います。そのようなことを含め
て、本日のこのユニバーシティミーティングを終わりたいと思います。



(小白川キャンパス参加者の様子)



(飯田キャンパス参加者の様子)

4．意見交換会

閉会后、会場を学内の厚生会館に移して、結城次官、齋藤知事を囲んで仙道学長、役員、教職員、学生が大勢出席し、沼澤理事の乾杯の発声により和やかに意見交換会が行われた。



左から
齋藤知事
結城次官
仙道学長
鬼武理事

左から
結城次官
仙道学長
田村理事



懇談する
結城次官
仙道学長
齋藤知事



学生たちと
仙道学長
小田教授





学生たちと
金澤助教授

懇談する
結城次官
松井理事



学生たちと
左から
藤田県庁部長
齋藤知事
鬼武理事

左から
本木監事
鬼武理事
学生
丸山文科省補佐
酒井県庁補佐

